

1

「隔たり」と地帯形成…「経済地理学」の起点

- 19世紀は、西欧列強で産業革命の流布により資本主義経済が発達した時代。
- それまで「地域性」は自然環境によるものだったが、自然抜きで、人間の行為だけで「地域性」が生じることを示したモデルが登場 ⇒ 経済地理学の起点。

それが von Thunenの「孤立国」… 農業の地域による違いが市場からの「距離」によることを理論的に説明した。

①どんな農業経営も、市場近くでやるのが有利… 市場への輸送費用が安い分、手間をかけた高収益の経営ができる。

②高収益の経営が集まる市場近くでは、農地の借地代も高い。

⇒ 高収益は、地代負担力の高さに反映

③高収益の農業は、市場から離れると収益性＝地代負担力が急低下。

…手間をかけているから。

立地地代

市場

市場からの距離

農業経営 I

II

III

④粗放的経営は、市場から離れても、収益性＝地代負担力の低下は緩い。

⑤各経営の地代負担力グラフはどこかで交差

⑥距離帯ごとに最も有利な経営方式が1つ決まる

3

シドニー都市圏の「チューネン環」

ニューサウスウェールズ

リベライナ

シドニー

ウェリントン

ブリスベン

ゴールドコースト

0 100km

生乳酪農

乳加工品

肉牛

羊肥育

羊+穀物

羊毛牧畜

Horsfall (1983)

2

農業地帯の形成

- 考えたのは、ドイツの農家フォン・チューネン
- 19世紀前半、徒歩と荷車で移動した時代

市場

自由式

林業

輪裁式

穀草式

三圃式

牧畜

Johan Heinrich von Thunen (1783～1850)

- モデルにある農業経営は、19世紀のドイツにおけるもの。
- 実際は、時代と地域によって多様。

4

日本では

- チューネンのモデルが前提とするのは、地形的な制約のない「等質空間」。
- 火山列島の日本では、地形的制約のない地域などない。
- 都市が拡大した現代では、市場の近くはたいてい市街地で、農業には不利。
- 農業の内容もドイツやシドニーと違う。
- 日本で高収益農業といえば野菜園芸
- …都市郊外に多かったので「近郊農業」

・仙台の近郊野菜農業地帯⇒

市街地

都市化で消滅した野菜産地

野菜産地

七北田川自然堤防 曲りネギ

七北田川 氾濫原

仙台市

新田 仙石橋

近世

1970年まで

1950年まで

松原

名取川 自然堤防 仙台野菜

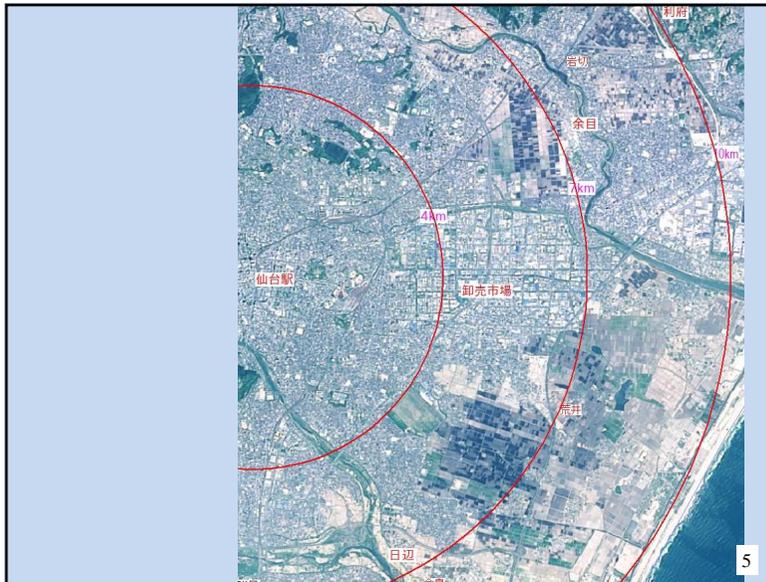
名取川 氾濫原

名取川 扇状地

1970年頃

『日本地誌4』三宮書店

市街化の影響を免れ、市場にも近いという、絶妙な「隔たり」が、「近郊野菜地帯」という地域性を維持させた要因に。



5

「隔たり」の縮小が生む新たな地域性

6

・交通手段の発展によって、物理的な「隔たり」はかなり解消された現代において、農業地帯の形成の様子は様変わり。⇒現代の「隔たり」は、時間的・物理的には縮小したが、「コスト」的にはあまり縮小していない。

・例えば、高知のナスやショウガ、宮崎のピーマンが仙台市場にも大量に入荷してくる。輸送コストは当然かかる。

・これら「西南暖地」では、長距離輸送のコストを補うため、温暖な気候を利用して、規格化された作物を大量生産して、本州の産地よりも早く出荷する体制を作り上げている。…いわゆる「輸送園芸」

・それには、施設栽培が必須
⇒高知平野のハウス群は日本一の集積度(下写真)。

・これは、大都市市場との「隔たり」を解消するために地域の人々が編み出した「地域性」といえる。



<https://photoimages.com/info/infoRM.aspx?SearchKey=6284600339>